

共に生きるために

アジア学院 2016 事業報告書

2016年4月1日～2017年3月31日



学校法人 **アジア学院**
アジア農村指導者養成専門学校

ご挨拶

学校法人アジア学院 理事長

大津 健一

アジア農村指導者養成専門学校 校長

荒川 朋子



過 去の e-mail をさかのぼると、上智大学のリチャード・ガードナー元教授からアジア学院の研修事業の外部調査の可能性についての言及が初めてあったのは、震災後の混乱の最中の 2011 年 7 月 27 日でした。思えばそれから6年の間、アジア学院の研修事業の評価と卒業生の影響度調査という2つの大きな評価プロジェクトは震災復興事業とほぼ並行して進められていました。そして今年の 4 月 20 日、上智大学に於ける調査結果の発表会をもって、この評価プロジェクトは終了を迎えました。この6年間の中間地点には 40 周年記念事業があり、震災復興、40 周年、事業評価というアジア学院の歴史において最も大きなイベントと言える3つの出来事がほぼ同時に起き、ついに終わりを迎えたということに万感の思いでおります。それらを可能して下さった神様のお導きと支えて下さった無数の方々に対しての感謝はどうい言葉で言い尽くせるものではありません。

この3つのプロジェクトからは多くのものが生まれました。震災復興では8つの建物が再建され、ベクレルセンターが設立されるなど放射能対策も進められ、40 周年記念事業では 60 名を超える卒業生を含む約 300 名の方々が参加して記念事業と記念シンポジウムが行われ、40 周年記念誌が日英両語でそれぞれ発行されました。そして事業評価は2つの調査が同時に進められ、ひとつはアメリカの Fetzer Institute の支援を受け、その結果は「草の根の架け橋」(英語版は“Bridging the Grassroots”)という冊子にまとめられました。もうひとつの調査は合同メソジスト教会、アメリカ合同教会のご支援で実に 12 か国 229 名の卒業生を現地に訪ねるといふ大々的な調査が可能になり、その結果は“Leading at the Grassroots: A Study of the Influence of Asian Rural Institute Graduates on Communities”と“Rural Leaders”(日本語版「農村指導者たち」)という2冊の本にまとめられました。つまりこの6年で訳本も含めると7冊の出版物が出ることになります。これもアジア学院の歴史の中ではかつてないことです。(出版物ということ言えば、4月にアジア学院紀要の第 1 号も出版されました。)そのひとつひとつの編集に多くの人が関わり、素晴らしい執筆者また翻訳者、そして有能な編集デザイナーが与えられたことを心から感謝しています。

この数々の巨大プロジェクトが終了して今思うことは、アジア学院が確実に新たなステージに入ったということです。40 周年というキリスト教において重要な節目の年に、奇しくもキャンパスは地震の被害を乗り越えて生まれ変わり、40 周年記念行事と事業評価によって過去の業績の評価と将来のビジョンの話合いが何度も持たれました。事業評価は私たちのこれまでの自己評価が必ずしも主観的な過大評価やうぬぼれに陥っていなかったことを実証しましたが、次のステップに向けて重要な提案も数多く提示してくれました。そこから導かれた将来のビジョンは、世界の各地で活躍する卒業生たちを、これまでのように単にアジア学院で培ったものを実践する者として傍から眺めたり賞賛したりするだけでなく、世界の農村に今まさに起きている諸問題の解決に、アジア学院の精神をもって現在進行形で当たっている貴重な当事者として認識し直し、アジア学院の研修に有意義なフィードバックをしてくれる大切なパートナーとして、彼ら、彼女らまたその団体と建設的な関係を築くことであると思っています。この方向性に向けて、ゆっくりでも着実に歩を進めることができるように、神様のお導きを祈っていきたいと思います。(ページ5に関連記事)

* 大津健一理事長は 2017 年 6 月 22 日、急性白血病のため昇天されました。享年 73 歳。

目次

農村指導者の影響	
アジア学院卒業生の影響度調査	2
ハートのあるリーダーを育てる	
2016年度研修	6
アジア学院のフードライフ	13
コーチングが支援する	
アジア学院の「最高の姿」	16
サポーターと共に築く	
支援のネットワーク	17
会計報告	22
渉外・募金活動の15年	24
2016年度コミュニティ	25
2016年度 卒業生	back



学校法人 アジア学院
アジア農村指導者養成専門学校

「共に生きるために」
2016年度 事業報告書
(2016年4月1日～2017年3月31日)

イラスト 小嶋 歩
印刷 株式会社 新晃社

© 2017 学校法人アジア学院
www.ari-edu.org

私のリーダーのイメージは大きく変わった。
実践を通して、サーバントリーダーシップを学んで
私もそんな人間になりたいと強く願っている。
今、人々を助けるためならどんな恐れも抱いていない。

ポール・ダイナ

中央アフリカ共和国 学生

農村指導者の素顔

卒業生の影響度調査を終えて

40年以上にわたりアジア学院が実施してきた農村指導者養成事業が、草の根の指導者である卒業生たちと農村コミュニティにどのような影響を与えたのか、私たちはより深く知りたいと切望してきました。理事会はこの願いを受け、元職員のスティーブン・カッティング氏と開発分野での経験が豊かなベバリー・アブマ氏を調査員とし、2年間に及ぶ研修の影響度調査実施を承認しました。その土地で活躍する卒業生たちに会い、彼らの話に直接耳を傾け、そしてアジア学院の真の成果を発見するため、アジアやアフリカ12か国の農村地域へ赴きました。



カメルーン：セオドラ・タタアさん(右、07年卒、14 TA)が孤児院を管理するエリック・タンカさん(左、07年卒)を訪問する。

農村指導者は、ここにいる――

コンサルタント、元職員 スティーブン・カッティング

ミヤンマー滞在中のことである。ある晩、私たちはとある村に一泊することになっていたが、行動を共にしていた卒業生のミョーさんは緊張した面持ちであった。その前の週に、この村からほど近い反政府軍の前哨地を政府軍が攻撃し、何人もの兵士が死傷したからだ。ミョーさんは、調査対象となっている近辺の農村地域の訪問と滞在は一日で済ませること、そして私たちを地域の中心地にある比較的安全な場所に移動させることを提案した。2004年の卒業生で聖公会の司祭であるミョーさんはこのカチン州で活動している。

私は、アジア学院に職員として9年間勤めたが、幾たびもミョーさんのようなダイナミックなエネルギーと希望に満ち溢れた人々に出会った。日本に到着するやいなや早春の肌寒さに震え、新しい環境に戸惑う彼らを、私たちは心から出迎える。学院に集う人々と食事や農作業、笑いや涙を共にして、アジア学院のコミュニティを形成していく。そして日々の研修によって、彼ら自身がリーダーとしての資質、新しい自信と可能性に気付くことで内面的に成長し、変革していく過程を目の当たりにした。

もちろん、彼らの成長は心躍る喜ばしいことではあるけれど、アジア学院のミッションにおいては一部分でしかない。彼らが故郷に帰り学院での学びを自分たちの仕事に活かしていくように、私たちの務めも継続していくのだ。

ミョーさんのコミュニティは、私達が調査のため訪ねた 200 以上の村々のひとつだ。この地に到着したとき、私はミョーさんが新しい光の中にいるのを見た。彼は私がアジア学院で出会った愛すべき人たちの一人だが、その魅力と素質は当時のままだ。ミョーさんは、自身が働く 29 以上の村のうち3村に案内してくれた。ある村では、村人たち自らが農村開発委員会を組織しイニシアティブをとるプロジェクトについて、メンバーの一人が上

気して説明する様子を、ミョーさんは傍らでじっと見守っていた。公共の目的のために塀を建設すること、貯水タンクとトイレをつくること、穀物銀行および相互組合を組織し運営すること、夜中に蓄電する精米用発電機を設置することなど多岐にわたる。ミョーさんは村落開発委員会がプロジェクトの指揮をとり、村人たちが主体的に実行していると語った。実績がある彼を村人たちが信用していることが伺えた。

また、彼が従事する 10 村は仏教の村である。村人たちは、はじめ何故キリスト教の司祭がこんなにやる気があるのかを疑った。反政府軍と政府軍の戦闘が続いていたため、宗教が異なるということが不信感の原因のようだった。しかし、このような状況にあっても人々に安心を与える能力というのは、信頼を築くために大事な道具であるようだ。ある女性はミョーさんについてこう語った。「彼には何か裏があるんじゃないかと疑っていたけど、今は違う。私利私欲で行動しないし、また良く説明してくれる。冗談を言い合う友人でもあるんです。」

私たちの訪問中、ミョーさんは多様性に溢れたアジア学院コ



カチン族の村人がミヨーさん(ダニエル・ミョーアウン、05年卒)の訪問を待ち望んでいた。



写真：スティーブン・カッティング

エマニュエル・バヤさん(左、09年卒)は地元のケニアで孤児院を営む他に、妻のブチエ・シエヘさん(13年卒)と一緒に有機農業を教える。



写真：スティーブン・カッティング

INSIGHT

「卒業生は、卒業後学びをどのように実践していくかという夢と計画を書いて卒業する。「Reflection Paper」と現地で取材したいことを比較すると、53%の調査対象卒業生が全てまたは一部の計画を実行に移せていた。しかしこれには、アジア学院にいたときには描くことができなかつたが、地域社会にとって重要なことを実行したということは含まれていない。計画が実行できるかどうかを決める最も重要な要素は、その計画が送り出し団体のビジョンと財政面にどううまく整合するかということである。

卒業生は、農業技術の実践においてよりも、リーダーシップにおいて大きな効果を発揮している。これは、有機農業を目的を達成するための手段として使用するリーダーシップ養成機関であることを希望するアジア学院の要望に沿うものである。効果的なリーダーシップは、卒業生が特定のコミュニティに住むかどうかではなく、卒業生がコミュニティの人々の中に入って行くことの重要性を備えていたかどうかにかかっているように見える。コミュニティ自体が変わっていくように参加型モデルを用いてサポートとモニタリング

に従事するサーバントリーダーは、幅広い独特な側面で長期的かつ積極的な発展に寄与する。」

ベバリー・アブマ
調査コンサルタント



コミュニティで生活したことが自分の心に焼き付いているのだと繰り返し話をしてくれた。共に学び、協力する土壌が整ったアジア学院なら、異なる民族、言語、文化背景のある人々が集うことができる。この経験が、故郷で地域のために働く彼の原動力となっている。

ミヨーさんと村人とのやりとりを見て、これこそが高見先生が抱いていたビジョンなのではないか、と感じた。コミュニティのリーダーとして、そこに暮らす人々のために自身の人生を捧げる覚悟がある人材に投資するというビジョンである。村の外部者にできる業ではない。彼は、コミュニティの人々同士を繋げ、信頼を築き、そして各人が自信を持てることを心から信じている。

この調査中に最も印象に残ったことは、アジア学院が行う研修内容が、卒業生それぞれのニーズに合うように本当に多様であることだ。インドネシアではティゴール・シホンビンが低価格で、発酵床システムが導入された豚舎や鶏舎を建設する方法を農民に教えている。これはアジア学院で紹介されたシステムだ。東北インドでは、リンヌー・トータンがアジア学院の研修が終わった数か月後に教育機会提供を兼ねた孤児院を開設している。この学校は子ども達の食糧と収入をもたらす家庭菜園と鶏舎が併設されている。スリランカではナセル・モハマドが300以上のクレジットユニオンを運営している。お金を中心にした議論ではなく、彼らに「あなたの夢は何?」という質問を投げかけ、コミュニティ内でも彼らが話し合える場を設けることから事業を始めている。カメルーンでは、ジェーン・フランシス・ベリニユを通してヤビ・ポット女性農業グループと出会うことができた。女性たちはバスケットいっぱいのヤムイモをジェーンと私たちにプレゼントした。ジェーンは、ヤムイモは高価だからと言って遠慮すると、女性たちは「どうぞ持って行って、食べる以上にできるのだから。私たちは裕福な農家なのよ!」と誇らしげに言った。私の目には、彼女たちの美しい未来を自信と希望に満ちて話す姿が、アジア学院が望むストーリーの完成であるように映った。

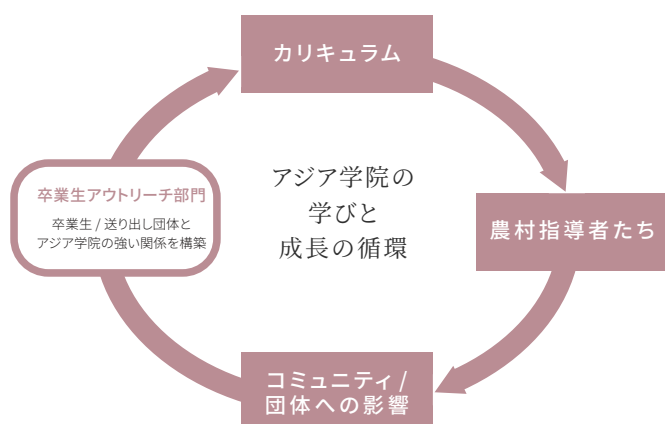
この2年間にわたる調査は、アメリカ合同教会(United Church of Christ)と合同メソジスト教会救援委員会(United Methodist Committees On Relief)から資金協力を頂きました。ベバリー・アブマは収集された情報の分析を行い、その研究から得た発見と提案は彼女が執筆したレポート「Leading at the Grassroots: A Study of the Influence of Asian Rural Institute Graduates on Communities」に詳述があります。スティーブン・カッティングの調査結果は、美しい写真と共に卒業生たちのストーリーが書籍「農村指導者たち」に掲載されています。

スリランカと東ティモールで30年以上も農村開発と災害復興に働いてきたラクシュマンとネルムデビ・ペレーラ夫妻(共に77年卒)。

卒業生影響度調査— 次のステップへ

校長 荒川 朋子

卒業生影響度調査の結果から導かれた将来のビジョンは、下記の図が示すように、世界の各地で活躍する卒業生たちの現実とアジア学院を結ぶことであります。「挨拶」の中で述べたように、卒業生たちを「世界の農村に今まさに起きている諸問題の解決に、アジア学院の精神をもって現在進行形で当たっている貴重な当事者として認識し直し、アジア学院の研修に有意義なフィードバックをしてくれる大切なパートナーとして、彼ら、彼女らまたその団体と建設的な関係を築くこと」であると思っています。



卒業生や送り出し団体と関係を構築することの意義は、卒業生がフィードバックする世界の農村の現実がアジア学院の現カリキュラムの向上に役立つだけでなく、その他にも多々あります。まず事業評価が明らかにしたように、卒業生がアジア学院で描いた「夢」を卒業後に実現できるかどうかは、所属団体の理解があるかないかに大きく左右されます。したがって学生たちが学院で何を学び、それを帰国後どう活かそうと考えているのかを学生たちがアジア学院で研修に従事している間に、所属団体と整合していくことは大変重要なことであります。アジア学院と学生の所属団体の間によい信頼関係があれば、アジア学院はその両者の整合を助けることができ、結果的に卒業生たちの「夢」の実現の可能性が高くなります。またここ数年質の高い応募者の数が減少傾向にあります。その対策においても卒業生や卒業生の団体とのよい関係が、その地域の実態をより深く理解し、よい活動を行う団体を発掘しやすくするという状況を生んでいきます。その他にも卒業生への技術的、精神的サポート、卒業生同士の学び合いを助けることが卒業生の活動の成功率を高めたり、アジア学院の職員の能力向上に役立ったりと、期待される効果は様々です。

しかし、卒業生の数も今や世界56カ国1,300人を超え、その活動



写真：スリランカ・ネルムデビ・ペレーラ



写真：ミャンマー・チン州の首都ハカ町

高い山地にあるミャンマー西部チン州の首都ハカ町。アジア学院卒業生は、こういう田舎町とその周辺の村のみならず都会にも活躍する。

も性質も多種多様です。また彼ら、彼女らの考えるアジア学院像もまちまちです。これら多様な人間、団体との関係をアジア学院の研修に有意義に生かす方向に構築していくのは簡単なことではありません。それでも、卒業生の活動をこれまでのように傍観しているだけでは、アジア学院は次のステージには進めないという思いであります。そこでそのフレームワークと基盤作りに着手するための募金活動を始めました。まずは3年間この職務に当たる専任職員の人件費と活動費を1,000万円と定め、すでに600万円が集まりました。どうかこの募集活動の趣旨をご理解いただき、募金活動にご協力いただきたいと思っています。



クンボン・ステラ・カン
カメルーン 学生！



「アジア学院の研修に来る人は、とても特別な人たちだけなのだと思っていた。そして自分はまったくそんな価値がないと思っていた。でもこの9か月で、自分自身が変わったことに気付いた。以前は全くできなかった『人前で話すこと』もできるようになった。そしてリーダーとして人を導くこと、人々に愛情を注ぐこと、穏やかに人と接すること、忍耐をもつこと、自分をオープンにして全てのことを学びと受け入れることも。アジア学院の学びはクラスだけではなく。自分が学び、導いてもらったことを今度は私が人々に教えていきたい。それをもって、学院へ感謝の気持ちを表したい。」

ハートのある リーダーを 育てる

2016年度
農村指導者研修プログラム

2016年4月1日～12日12日

副校長・教務主任
大柳 由紀子



2016年12月、アジア学院は無事9か月間の研修を終え、13か国23名が卒業を迎えることができました。この研修を物心両面でお支え下さった全ての方に、心からの感謝を申し上げます。

学生たちが夢中でかけぬけていった9か月は、決して平たんなものではありませんでした。彼らの1人1人は母国のコミュニティで働いています。今年度の学生の平均年齢は41歳。最年少が33歳という年度は、さすがにめずらしいケースでしたが、例年でもアジア学院の学生の平均年齢は30代の半ばで、世間一般の持つ「学生」というイメージからするとやや年齢層が高い人々です。そんな年代の彼らにとって家族や所属する団体から離れての研修は、一言では言い表せない苦勞もあつたはず。中には日本に滞在中に家族を亡くした者も複数おりました。それでも彼らは言い続けるのです。「アジア学院に来てよかった。」「9か月は短すぎる。」そして「アジア学院で研修を受けることが、コミュニティの人々の未来のために必要なのだ」と。

キーコンセプトから生まれる学び

今年度を始めるにあたり、私たち職員はカリキュラムデザインをもう一度見直すことにしました。まずアジア学院の使命について全職員で学び直し、自らのよって立つ中心的思想として見つめ直しました。そして「自分の考える、アジア学院のキーワードとは何か」を話し合い、職員全員の考えるキーコンセプトを再構築しました。その結果、研修の3つの柱「仕える指導者」「フードライフ」「学びのコミュニティ」のもと、14の研修を表すカギとなる以下のコンセプトが決定されました。

「分かち合いの生活」、「多様性」、「個人の成長」、「霊的成長」、「社会的弱者をエンパ

ワーする」、「自己の気付き」、「食料主権」、「自然と調和して生きること」、「農村の価値」、「労働の尊厳」、「学びの共同体」、「平等性」、「自律した学び」、「実践による学び」。これらの言葉は新しく考えだされたのではなく、常に学院で使われている言葉や考え方を抜き出したものです。そしてこれらのキーコンセプトは学生に言葉で説明されるのではなく、座学、農場実習や見学研修、プレゼンテーションや報告書の作成、さらにはアジア学院共同体での生活の一つ一つを通して、考えを深め、話し合い、身に着けていくものです。だからこそ全職員がまずこれらのキーコンセプトの価値を共有し、その意味を深く理解し、日々実践していくことが必要なのです。

食料主権とフードライフ

「食料主権とは、人々やコミュニティー、国が、自分たちの農業・食料・土地などの政策を、社会的にも経済的にも文化的にも、それぞれの独特の条件にふさわしいものとして規定する権利である。アジア学院では地域資源を用いた自立を目指し、できるかぎり自分たちの食料を自給しながら、生命、食、自然の連携を強調している。コミュニティの自給こそが安定した生活をもたらす。単一栽培、市場のグローバル化、土地の集約化、地域文化の侵害から身を守るすべである。食料主権は大切な人権の一つであるが、それを農業使用の農業、緑の革命の影響、遺伝子組み換え作物の副作用が脅かしている。(トレーニングハンドブックより)」。

キーコンセプトの一つに挙げられている食料主権を追及するため、私たちは食料の自給、種の自給、飼料の自給に取り組んでいます。学院に来る学生たちも、リーダーシップの他に有機農業を学ぶことを目的としてやってきます。ではそもそも学生たちはなぜ有機農業を学びたいと望むのでしょうか。

もちろん草の根の農村指導者として彼らが向き合うべき相手は農民ですから、農業技術を身に着けること、新しい知識を農民に教えていくことは必要不可欠であることは容易に想像がつきます。ではなぜ有機農業なのか。私たちが日本で有機農業を実践していく上で考えるのは「食の安全」と「持続可能性」についてです。農業や化学肥料により食そのものが汚染され、あるいは環境にダメージを与えることを避ける、生きた土を守り育てることによって「耕せば耕すほど土は豊かになり、人間関係も美しくなる」農業を目指す、というの





が有機農業の根幹をなすことが多いと思います。しかし学生たちの場合は少し様相が異なります。

途上国と呼ばれる学生たちの国々では、農業が基幹産業です。都市部以外ではほとんどの人が農業によって生計を立てています。経営規模は国によって様々ですが、暮らしは楽ではありません。元々彼らの地域は、化学肥料や農薬を使わない伝統的な農業を続けてきました。そんな彼らの地域に国際援助の名のもとに、収量を上げるために高収量品種のハイブリッド種子が配られ、化学肥料や農薬の使用が奨励されたのです。最初のうちは行政やNGOの支援により無料で配布されました。そこで農民たちは全面的に化学肥料や農薬に依存するようになります。そして伝統的な農業技術が忘れ去られたころ、突然農民たちは農薬、化学肥料、種子を買うことを要求されるようになりました。ここにいくつかの問題が見られます。

まず第一に、農民が金に依存するようになったことです。種や化学肥料、農薬を買う農業をするには、たくさんの現金が必要となります。しかし農民たちには市場へのアクセスがないため、仲買人たちに依存するしかありません。仲買人たちは村にやってきて、安い値段で買いたたき、それを町で高額で売り払う。利益を得るのは仲買人であって、農民たちではありません。インドネシアの卒業生、ティゴ・シホンピンは言います。「『労苦している農夫こそ、最初の収穫の分け前にあずかるべきです』と聖書に書いてあるではないか。なのに現実には収穫の分け前は農民には来ない。有機農業こそが自立への道だ。農民たちが地元にある自然の材料を堆肥化するなどの有機農業を取り入れれば、肥料のために借金せねばならないという重荷から解放される。」

第二の問題は、日本や欧米の技術支援が農薬依存に偏ったことです。病虫害がなぜ発

生するのかという根本原因を考えることなく、農薬が海外から持ち込まれました。農民たちは外国語で書かれた注意書きなど読むことはできません。例えば「1000倍希釈」とあれば、日本であればきっちりとはかって水で薄めて散布します。でも注意書きを読むことのできない彼らはどうするか。なんと、どれほど舌がしびれるかと味をみるというのです。散布にあたってマスクもせず、自分が被ることなど心配することもなく、量も濃度もかまわずに彼らは農薬を撒きます。日本では1971年に禁止されているDDTが、今でも使われている地域も多くみられます。マラリア対策で蚊をコントロールするためと称して援助で入ってきたDDTが、水田や畑で使われている現状があるのです。学生たちからは「種子消毒のために薬剤をコーティングされたトウモロコシが食用としてマーケットに回って、中毒死が出たんだ」「僕の国では腎臓障害が突然増えた」「私の村はガンが増えたわ。父も兄も夫もガンで亡くなったの」という話が次々と出てきます。また日本では、魚毒性のつよい農薬は河川などへの流出を防ぐことが定められていますが、学生の国ではこれを漁に使う地域があるといえます。流せば魚が死ぬので、わざと川にまいて魚を殺し、その魚を集めてマーケットに売ったり自分で食べたりするのです。だから、アジア学院では農業の危険性を必ず教えることにしています。授業の後、ミャンマー人学生があわててこう言いました。「今夜、すぐにお父さんに電話しなきゃ。いつも農薬を使って魚を捕っているのよ。それが体に悪いなんて、今まで誰も教えてくれなかった。」

つまり学生たちが有機農業に転換している理由には、健康被害、環境への

ACHIEVEMENT*

荒川 治

副校長・教育部長（農場長）

「学生たちは、仕える指導者として環境問題と自然の循環について十分認識するようになった。」



*2016年度に達成したこと

カリキュラム

研修時間総計：1,971時間

講義一覧

指導者論

アジア学院の指導者論
 サーバント・リーダーシップ
 アジア学院の歴史と建学の精神
 参加型農村調査法
 自律学習
 時間管理法
 プレゼンテーション技術
 ファシリテーション技術
 プロジェクト立案法
 ストレス管理法
 宗教と農村生活
 報告書作成指導
 Healing Between the Worlds (分断を癒すためのワーク)

荒川 朋子
 荒川 朋子、大柳 由紀子
 荒川 朋子
 荒川 朋子、大柳 由紀子
 大柳 由紀子
 ティモティ・アパウ
 大柳 由紀子
 大柳 由紀子
 大柳 由紀子
 ジョセフ・オザワ*
 ジョナサン・マッカーリー、ティモティ・アパウ
 キャサリン・フローディ
 ウィンドイーグル*、関京子*

開発論

環境と開発
 栄養概論
 共助組合論
 ローカライゼーション
 ジェンダー論
 アジアの人身売買の問題
 足尾銅山鉱毒事件と田中正造
 気候変動のもたらす問題
 開発とアジア学院の使命
 気候変動と国際的パートナーシップ
 那須疎水と西那須野開拓の歴史
 友の会の活動について

田坂 興亜*
 ザチボル・ラコー
 遠藤 抱一
 鎌田陽司* (NPO 法人「懐かしい未来」代表)
 荒川 朋子
 甲斐田 満智子* (国際子ども権利センター)
 坂原 辰男* (田中正造大学)
 永田 佳之* (聖心女子大)
 J・B・フーバー* (アジア学院北米後援会、iLEAP 代表)
 J・B・フーバー* (アジア学院北米後援会、iLEAP 代表)
 田村 修也*
 全国友の会、友の会各支部

持続可能な農業・技術

持続可能な農業概論
 有機農業
 野菜・作物概論
 畜産概論
 作物病害虫管理
 適正技術
 化学農業の危険性
 熱帯における自然農業
 アグロフォレストリー
 生産者と消費者の提携
 バイオガスワークショップ
 立体農業の哲学
 農業技術実習
 畜産技術実習
 肉加工実習

アルデンドウ・チャタジー* (76年卒業・インド)
 荒川 治
 荒川 治
 ギルバート・ホガング、大谷 崇、ティモティ・アパウ
 荒川 治
 潘 炯旭
 田坂 興亜*
 村上 真平* (自然農家)
 山田 祐彰* (東京農工大学講師)
 戸松 礼菜* (帰農志塾)
 桑原 衛* (NPOふうど代表)
 芳賀 欣一* (戸沢村国際交流協会会長)
 荒川 治、櫻井 将伸
 ギルバート・ホガング、大谷 崇、ティモティ・アパウ
 大谷 崇、小出 秀夫*

日本語、日本文化

小倉 恭子*

有機農業実習

有機農業、畜産、食品加工の論理的
 および実践的知識の習得

野菜作物

ぼかし肥作り、堆肥作り、土着菌の採取と活用、天恵緑汁、魚のアミノ酸資材、水溶性カルシウム、炭焼きと木酢作り、籾殻くん炭、自家採種、練り床を利用した苗作り、キノコ栽培

畜産

養豚 (人工授精、出産、去勢)、養鶏 (育雛、人工ふ化)、養魚、家畜衛生、飼料配合、発酵飼料作り、発酵床式畜舎

肉加工

ソーセージ、ハム

農場管理活動

グループによる農場管理
 (野菜作物栽培、および畜産管理)
 フードライフワーク
 (自給自足のための農作業および給食準備)
 グループリーダーシステム

その他の研修

コミュニティ・ワーク (田植え、稲刈りなど)、
 内的成長を促す活動 (朝の集会、コンサルテーション、報告書作成)、口頭発表、収穫感謝の日、国際交流プログラム、見学研修、農村地域研修旅行、西日本研修旅行、ホームステイプログラムなど

* は特別講師



影響のほか、農薬や肥料を通じた搾取から自由になること、出費を抑えて貧困からの脱却を図ることなどがあげられます。その他にも長年にわたる化学肥料の使用により劣化した土を改善すること、気候変動による栽培環境の変化に強い育て方をすることなども重要です。つまり「健康な食を生産すること」「地域資源を活用すること」「健康な土を取り戻すこと」こそが、貧困脱出のカギであり、食料主権を手に入れる大切なプロセスであるとアジア学院は考えているのです。

「自己の気づき」を通じた 内面成長を目指して

授業で新たな知識を得、技術を身に付けることも大切ですが、自らの内面に向き合い磨いていくこともまた大切な研修です。今年は特に自己のリフレクションが強調された年となりました。リフレクションの手法を変え、学生たちはルーブリックと呼ばれる評価基準法を利用した自己評価表を自分で作りました。まずリーダーとしての資質で自分が大切にしているのはどんな点か(例えば「傾聴」「忍耐」「コミュニケーション」など)を考え、その資質をあらわす具体的な行動は何か(「良い質問を投げかけることによって、自分の理解を向上させることができる」「問題に反応する前に時間をおく」「他人の意見に耳を傾ける」など)を各自考えて評価表を作成しました。そして、自分はその行動をどの程度理解し実践しているかについて研修期間中3度にわたって自己評価を行いました。さらにその自己評価に基づいてコンサルタントとなっている職員が個別にリフレクションを行い、フィードバックをしていくという新たな方法がとられまし

ACHIEVEMENT

ポール・ダイナ
中央アフリカ共和国 学生



「私のリーダーシップのイメージは、ものすごく変わった。いろいろなリーダーシップの実践を通して、サーバントリーダーシップを学んだ。私もまたそんな人間になりたい。いま、人々を助けるためには、どんな恐れも抱いていない。

私はまた、地元の食べものの大切さも学んだ。良い食べものは外部からもたらされるのではなく、地域で生産されるんだ。以前は地元の食べものなんて良くないと思い込んでいた。でも今私は、一番良い食べものは、地元のコミュニティで生産されたものだって気が付いたんだ。そのことを人々に分かち合っていきたい。私たちの手で、私たちの食べものを作っていこう、って。」

た。まだまだ試行錯誤を繰り返しながらの新手法でしたが、学生たちの成長には大いに役立ちました。今までも学生たちはワークショップを通じてリーダーとして大切な資質を考え、分析をしていましたが、それを個人の行動に落とし込むところまで到達できる学生はあまりいませんでした。この新手法を用いた評価表は、行動しているかどうかまでを必ず振り返ります。他人に言われるのではなく、自分で自分を評価していくこのプロセスを通して、幾人かの学生は劇的と言っていいほど変

わっていきました。自分と違う意見に耳を傾けるようになり、グループの中で起こった衝突に正面から取り組み、文化の違いを理解しあい、失敗から学ぶようになること。言葉にするほど簡単ではないこれらの変化は、彼らをリーダーとして一步一步成長させていったのです。

3分野 40 科目にわたる座学、583 時間にもなる農業実習、内的成長のために費やした 184 時間、12 都府県・計 31 日間に及ぶ研



修旅行。9か月・252日・1971時間に及ぶ全ての学びは彼ら自身のためではないことを、学生たち一人ひとり理解しています。家族や団体のことを心配しながらも、彼らがモチベーションを保ち続け学び続けることは、容易なことではありませんでした。なぜ学び続けるのか、学びとはあなたにとって何なのかと学生に聞いたことがあります。ある学生はこう答えました。「僕は神の道具となるために学ぶ。知識は自分のためではない。人々を助けるためだ。」別の学生はこう述べました。「学ぶほど、知らないことができてきて、畏れを感じる。学ぶほど、農民の偉大さを知り、尊敬するようになる。」

学生たちは学院から巣立っていきました。しかし彼らの学びはまだ続きます。コミュニティに戻ってからはあなたたちは農民たちからこそ学ぶのだ、と私たちは言い続けてきました。彼らがそれを実行することを私たちは信じています。なぜなら彼らこそが、この学びの意味を、人々に奉仕する姿勢を、何よりコミュニティへの愛情をもっともわかっている、草の根のリーダーだからです。

どうか全能の神が、彼らの行く末とコミュニティの未来をお守りくださいますように。彼らの夢が豊かに実現する日を私たちは心から信じています。

見学・交流等、研修でお世話になった方々

順不同・敬称略

特別講師

田坂興亜、村上真平、アルデンドウ・チャタジー、鎌田陽司、山田祐彰、桑原衛、芳賀欣一、小倉恭子、甲斐田満智子、坂原辰男、田村修也、戸松礼菜、J・B・フーパー、ジョセフ・オザワ、ウィンドイグル、関京子、永田佳之、小出秀夫、全国友の会、友の会各支部、那須塩原警察署

農業関連見学・研修先

帰農志塾、金子美登・石川宗郎、田下隆一、桑原衛、民間稲作研究所

夏期個人研修

自由学園農場、関根養魚場、成澤増雄、エルム福祉会、ゆいの里、マ・メゾン光星、かりいほ、那須友の会、チーズ工房那須の森

見学先・交流団体

【栃木県】那須野ヶ原博物館、足尾銅山鉱毒事件学習(旧松木村跡、足尾製錬所)、渡瀬川遊水池、西那須野幼稚園、槻沢小学校、黒羽中学校、宇都宮北高校、宇都宮女子高校、国際医療福祉大学、西那須野教会、那須塩原教会、家の教会しおん、大田原カトリック教会、那須高原教会、矢板教会、塩谷一粒教会、四條町教会、宇都宮上町教会、鹿沼教会、松原教会、氏家教会、足利教会、足利東教会、小山教会、上三川教会、鹿沼キリスト教会、上河内教会、栃木教会

【東京都】日本キリスト教団婦人会連合、東京ユニオンチャーチ、日本バプテスト同盟婦人会

【他府県】桐生東部教会、渡良瀬川鉱毒根絶太田既成同盟会、丸木美術館、ARISA(アジア学院サポーター)各位、各地ロータリークラブ

農村地域研修

山形県置賜地区】渡部務・美佐子、長井市レインボープラン推進協議会、基督教独立学園、黒沢巖、高昌共生塾(遠藤周次)、高畠町住民生活課エコタウン推進室、米沢郷牧場、JA山形おきたま農業組合、川西ときめきセミナー(佐藤恵子、原田加矢乃)、川西町役場(原田俊二町長)、しらたかノラの会、米沢興議教会、草岡ハム加工組合、秋津ミチ子

【山形県戸沢村】戸沢村役場産業振興課地域づくり推進係、産業振興課、国際交流協会、芳賀欣一、新庄最上有機農業者協会

【山形県庄内地区】加藤敏一、相馬一広、志藤正一、共立社鶴岡生協、JA庄内たがわ管農政課、荘内教会(矢沢俊彦)、荘内教会保育園、藤島町農村環境改善センター、庄内協同ファーム、庄内産直センター、鶴岡市藤島庁舎エコタウン室、佐藤昌司、JA鶴岡西郷支所、有限会社ドリームズファーム、小野寺喜作

【秋田県仁賀保町】土田雄一、佐藤喜作、JAにかほ、にかほ市役所、曹洞宗太白院、都市農村交流センター【岩手県】酒匂徹

西日本研修旅行

【東京都】農村伝道神学校【静岡県】聖隷学園、聖隷クリストファー中・高等学校、遠州栄光教会、十字の園、アドナイ館、第二アドナイ館、山中忍【大阪府】大阪南YMCA、NPO釜ヶ崎支援機構、野宿者ネットワーク(生田武志)、関西いのちの電話、関西沖繩文庫、希望が丘教会【熊本県】水俣はんのうれん(大澤菜穂子)、水俣病資料館、ほっとハウス【広島県】広島平和記念資料館、畠山 裕子(被爆証言)【三重県】愛農学園高等学校【岐阜県】永谷嘉規・香、加藤優志、高谷裕一郎、町上広子、雑草塾

アジア学院の フードライフ

副校長・教育部長(農場長) 荒川 治

生物多様性による 環境創造型循環農業

田んぼで除草をしていると年々、田んぼで見かける生物の種類が増えてきているように感じます。カエルやトンボ、蜘蛛の他にミズカマキリやタガメなどを観察することができ、サギも例年より多くみられました。田植え後、一ヶ月ぐらいで青浮き草が大量に発生し、田んぼ一面を覆いました。

バランスのとれた生態系が保たれていれば、一種類の虫が異常に大量発生することはありません。食物連鎖によって、天敵と捕食される虫とのバランスがとれるからです。

8月、生物多様性国際会議が栃木県の南部の小山市で開催されました。学院の職員やトレーニングアシスタントも国の環境保全型農業について発表を行いました。

栃木県小山市の渡良瀬遊水地は 2012 年にラムサール条約湿地に登録されました。地方創生の目玉として、市は渡良瀬遊水地関連振興5ヵ年計画を策定し、治水機能確保と共にエコミュージアム化を目指しています。浅い池や深い池を水路でつなぎ園路を整備し、東京の小中学生や親子連、ハイカーなどに、自然観察や自然体験の場を提供しています。





そして環境にやさしい農業を中心とした地場産業を推進するため、冬水たんぼを活用した無農薬、無化学肥料の米作りを促進しています。またナマズやホンモロコなどの養殖、ヨシ紙づくりなどの地場産業の振興もはかっています。遊水地には多様な生物が生息していて、絶滅したトキや絶滅危惧種のコウノトリなどが棲める環境整備も進めています。冬の間も田んぼに水を保つことができれば、生物の多様性が増し、土がトロトロになって田の雑草を抑える、天敵も増えて、害虫を捕食してくれます。

学院は田をすべて近隣の農家から借りていましたが、この冬、自身の田んぼを所有することとなりました。現在、この田んぼに手堀りと打ち抜きで井戸を掘っています。水もちが良いため、井戸が完成すれば冬水田んぼを実現できるかもしれません。

県北では、ヘリコプターによる農薬散布が盛んですが、ネオニコチノイド系農薬散布による危険性が懸念されています。ネオニコチノイドは神経毒性を持つ浸透性農薬であり、複合毒性を持ちます。他の農薬と合わせて使うと相乗効果で毒性は数百倍から千倍にもなります。脳内に入りやすく残留しやすいため、自律神経系や中枢神経、胎盤、胎児の脳の発達に影響する恐れがあると言われてい

ます。同じ栃木県である県北でも、小山市のような環境創造型農業を農家、市民、行政、NPOなどが一体となって推進することはできないのでしょうか。

キノコの安定供給に向けて

東日本大震災以降、アジア学院で栽培・収穫されるコマや野菜は、放射能汚染値(セ

シウム)を測定し、安全性を確認した後に食料として供給されます。主要農産物である米、野菜に関してはアジア学院内の基準値である37ベクレルを下回っていますが、2011年からアジア学院内の森林に自生しているキノコが食卓に上がることがなくなりました。震災以降、自生キノコの放射能測定値が基準値を大きく超えたままだからです。その値は徐々に低くなってきているものの、依然としてアジア学院が守る基準値37ベクレルを超えています(日本政府の基準値は100ベクレル/kg)。

キノコには食物繊維や多種類のミネラルが含まれており、積極的に摂取したい食品ですが、自然林から切り出してきた木に植菌をし、キノコを栽培する原木栽培の手法ではキノコが放射性物質を吸収してしまい、その値が基準値を超えてしまいます。そこでオガクズ菌床袋栽培により、アジア学院でも食べて安全なキノコの安定供給ができないか考えてみることにしました。放射能測定値が基準以内のオガクズを他所から集めてくる必要がありますが、これに米ヌカを混合したものをキノコ栽培用の培地とし、耐熱性のある袋、または容器に充填します。この培地を高圧釜で滅菌処理した後、純粋培養したヒラタケ(*Pleurotus ostreatus*)の菌糸を植え付け、培養を試みました。

結果、キノコ本体から取り出した組織からキノコ菌体の純粋培養に成功、これを袋に入ったオガクズ培地に植菌するところまで操作できたものの、キノコ子実体発生までにはいたりませんでした。ヒラタケはその子実体発生のために20℃以上の温度を要求しますが、この時すでに晩秋から初冬への時期であり、オガクズ培地内で生育するキノコ菌糸の伸長が十分ではなかったためです。次年度はキノコ栽培

期間を初夏以降となるよう調整し、十分な生産量を確保するため計画中です。

もちろんこのキノコ栽培の全工程は、実演をもって学生に説明しました。基本的にオガクズを使用する菌床キノコ栽培は省力的に作業することが可能であり、温湿度環境を適正に管理すれば、誰でも比較的容易に栽培することができるため、学生の関心は高かったように思われます。

キノコ栽培の根幹となるキノコ菌糸体の純粋培養には、無菌条件下で行いたい作業がいくつかあり、いったん雑菌と混じってしまうと、目的とするキノコ菌のみを純粋に培養することができなくなります。今回は試験栽培ということでキノコ菌のための微生物培養設備に予算をかけることはできませんでしたが、純粋培養の精度を上げるためにも、無菌操作ができるクリーンベンチ、培地内で雑菌の発生を抑制するためのオートクレーブ等、最小限の設備を整えたいと考えています。

豚の純粋種導入

従来、アジア学院ではランドレースと大ヨークシャーが予め交配された母豚5頭に、デュロックという豚の精液を定期的に人工授精して、子豚を産ませていました。本当は交配用の雄豚を導入して自然交配するのが、学生のトレーニングの上では最適なのですが、交配用の雄豚を導入するにはアジア学院の母豚の数では少なすぎて管理が難しいのです。また母豚も精液も外部から購入しなければならないと、特に母豚は2-3年程度しか繁殖に供用できず、常に更新(買い替え)が必要でした。そこで予めランドレースの純粋種の豚を導入して大ヨークシャー種の精液を人工授精を行うことで、産まれた子豚のな

ACHIEVEMENT

ザチボル・ラコー
給食担当職員

「給食に関わる職員とボランティアたちが各人の目標設定を行ったことが、2016年度の最も大きな成果です。それは、見落としはならない重要事項を皆で確認できただけでなく、それぞれが「私はなぜここにいるのか」という存在意義を確認でき、個々人の成長に繋がりました。

そして、主要なメンバーたちの間で、財務状況を共有することもできました。真のリーダーは、情報共有と他者との信頼関係を構築する組織管理の面で透明性が求められるのだと確信しています。」

コイノニア食堂での 年間消費(平均)

アジア学院の給食部はコイノニア食堂で毎年必要とする食数を4万5千食と推定しています。この需要を満たすための労働、材料、土地などを提供する農場部と密接に計画を立て、アジア学院コミュニティの栄養バランスや特別のニーズ(ベジタリアンやハラール食材)などに注意しながら給食作りに取り組んでいます。

米	5,500 kg	たまご	25,600 個
じゃがいも	1,800 kg	豚肉	1,000 kg
にんじん	800 kg	鶏肉	500 羽
さつまいも	700 kg	魚	240 kg
玉ねぎ	650 kg		
小麦粉	300 kg		
にんにく	160 kg		

かから母豚を選抜し、残りを肉用として出荷することが出来るようになり、コストを軽減することが出来るだけでなく、母豚に適した豚を自分達で選ぶことができるようになると期待しています。

山羊の放牧場作成と雄山羊

アジア学院では山羊を夏場はロープと首輪を使って畑の畦などに放牧し、雑草を食べさせていました。しかし移動のための時間がかかることや、山羊にとってもストレスであること、そして時折脱走して計画外の交配をすることから、放牧場の設置をすることにしました。男子寮とコイノニアの間の斜面を二区画に金網で区切り、山羊の放牧地としました。計画段階から山羊・魚グループの学生が中心となり、お互いの経験を生かして互いに学びあいながらグループとしての結束を高め、卒業式の数日前に遂に完成しました。完成後にはコミュニティの皆で完成式典を行い、テープカットを実施しました。あわせて山羊小屋の改良工事も実施し、これらの学生の努力の賜物が将来の学生、そしてスタッフにとっても大きな学びとなることを期待しています。

作成に当たって多大なるご支援を頂いた、米国・ハワイ州のパールシティコミュニティ教会と、放牧場用の支柱をご提供いただいたウィンドファミリー農場の上田様に心より御礼申し上げます。

アジア学院ではザーネン種とシバ種の山羊を飼育しています。秋は山羊の交配の季節ですが、飼育している雌山羊に交配できる大きさの雄山羊がいなかったため、初めて外部からヌビアン種の雄山羊を3ヶ月間お借りして交配しました。ヌビアン種はアフリカ原産の乳用種で乳脂率が高いのが特徴で、日本でもチーズ生産者に人気が出始めています。アジア学院でも将来、山羊チーズを作ることが出来るかもしれません。ご期待ください。

鳥インフルエンザ対策

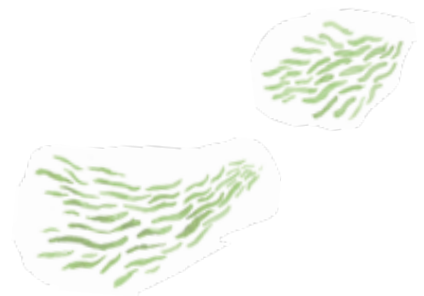
家畜を飼う上で、伝染病の恐ろしさは常につきまといまふ。アジア学院の飼育方法は家畜にとってストレスが少なく、伝染病にも強いはず、とは信じていますが、もし伝染病がアジア学院に侵入すれば、その家畜を全て処分しなければならないだけでなく、周囲の畜産農家に与える影響も大きく、畜産を再開することが難しくなる可能性があります。しかし様々な制約から完全な伝染病の防除は困難を極めます。それでも家畜小屋に入る前に消毒槽に長靴で踏み込んだり、出荷後に消石灰を散布したり、鶏の場合はワクチンを投与したり、畜糞の堆肥化や食料残渣の発酵飼料化と言った循環型農業の考え方を維持しながら、伝染病予防ガイドラインを作成し出来る範囲での予防を実施しています。特に今年は鳥インフルエンザの多発期でもあり、鳥小屋の従来の金網の上に、野鳥や野生動物の侵入を防ぐために、より目の細かい防鳥網を設置せざるを得ませんでした。

【管理機の導入】従来、畑の耕運はトラクターあるいは管理機で行っていました。しかしいずれも野菜作物部門と共有のため、農繁期には使用日程の調整が難しいことがありました。そこで4月に新しく管理機を導入し畜産部門専用とすることで、畜産部門の畑を効率的に耕運や中耕できるようになりました。



コーチングが支援する アジア学院の「最高の姿」

2016年、アジア学院では職員研修として「コーチング」というコミュニケーション手法を学ぶ機会を持ちました。3人のプロのコーチにご協力いただき、計7回のセッションを行いました。



具体的な内容

1) キックオフ

アジア学院の使命と基本概念（キーコンセプト）を再考し、スタッフが自らの使命とつながり直すことで、アジア学院で働く喜びや誇りを思い出しました。

2) コーチング・トレーニング

基礎となる傾聴、拡大質問、反映、認知、要望などのスキルを練習。また人の存在の大きさを信じて関わること、あらゆる感情と共にいること、安心して勇気付けられる場作りなど、コーチングに大きな影響をあたえるコーチの「あり方」についても学びました。

3) チーム・コーチング体験

アジア学院の「今」に向き合いました。「様々な国、文化、宗教的背景を持ったメンバーとどうしたらもっと理解し合えるか?」「アジア学院の組織・経営的な課題についてどんな協力ができるか?」「アジア学院らしさをわかりやすく発信するにはどうしたらよいか?」など、本質的な課題について真剣な対話を重ねました。

参加した職員からは、「コンサルテーションの質があがった」「参加者の悩みを引き受けるのではなく、健全な境界線を持って支援できるようになった」「共に働くアジア学院の仲間達が以前よりもっと好きになった」などの声がありました。

アジア学院のスタッフの皆さんにコーチングを経験いただいたこの1年間、毎回のセッションが学びと発見の連続でした。もしかしたら、誰よりも学ばせていただいたのは私自身だったかもしれません。

忘れられないエピソードの一つはコーチングトレーニングの初日でした。「傾聴とは何ですか?」と問いかけた時、スタッフの一人から「傾聴とは癒しです」という答えが返ってきました。私はコーチングのトレーニングをこれまで約15年間してきましたが、こんなにもシンプルに本質をいい抜いたコメントに出会ったことはありません。まさにアジア学院にハートを射抜かれた瞬間だったのです。

トレーニングでは、スタッフの皆さんのこれまでの人生経験や学生との日々の真剣な関わりがコーチとしての「あり方」に現れていて、ツールやスキルといった「やり方」を超えて豊かな対話となっていました。また、チームコーチングのセッションでは、共に仕事をする皆さんがお互いの素晴らしさを認め合い、真剣な表情でアジア学院の今と未来について熱く語り合う様子が印象的でした。

アジア学院のスタッフの皆さんがコーチングを味方につけることで、ますます深く世界のリーダー達と関わり、この世界で唯一無二の活動をチームとして続けていけますように。そして、サーバンントリーダーシップを体現するスタッフの皆さんこそが、毎日を喜びをもって過ごされますように。コーチングが少しでもお役に立てたとしたら、こんなに嬉しいことはありません。

ご協力頂いたコーチ

森川 有理、関 京子、佐藤 扶由夫

森川 有理
プロフェッショナル・コーチ



サポーターたちと 共に築く 支援のネットワーク

サポーターとの繋がり と国内事業の充実を目指して

国内事業課 販売・広報 佐藤 裕美



ア ジアやアフリカの農村から学生たちを招へいし、農村指導者を養成するための事業予算規模は約 1.3 億円。活動の原動力である収入源の主たる部分は国内外の個人や団体からの寄付金や奨学金である一方、奨学団体については年々その団体数や受領する総額が減少傾向にあります。こうした既存の支援団体との連携も保持しつつ、自助努力による収入

創出を目標にして、国内事業課では様々な活動を行っています。国内事業課が収入源として関与するのは、学院内外でのイベントや滞在されるお客様からの宿泊収入、余剰農産物の販売、教育機会の提供などです。これは全体の収入の約 20% に値します。皆様のご厚意である寄付金にのみ依拠するのではなく、自助努力による安定的な収入創出によって健全な学校運営に貢献することが課題です。

2016 年は新しい職員を 2 名迎え、個人や団体、新旧を問わず様々な支援者の方との出会いの場を大切にすることを強調しました。また、海外の奨学団体や支援者との連携窓口となる国際協力活動を担当する職員も新たに配属され、長期的な視野で国内外の支援者様たちとの繋がりがより豊かなものになるよう、教育活動の両輪となるように活動しています。

学生たちが奉仕する指導者として彼らの故郷で活躍できることを心から望み、全ての職員とボランティアが思いを一つにして共に働いています。既存の支援者のみならず、初めてアジア学院を知った方々であっても、その使命と活動に興味を抱き、また食事や見学などを通して学院の活動を体験し「草の根の農村開発に貢献する一人としてアジア学院を支えたい」というお気持ちを共感頂けることが、私たち国内事業課にとって何よりの喜びです。

活動の実態

アジア学院の運営は、1,000 を超える個人・団体からのご支援に支えられています。国内事業課は、こうした支援者の方々からのお励ましやお心ご寄附として届く際の窓口であり、アジア学院を見学される方やワーキングビ

ジターおよびスタディキャンパーの方々、農産品をご購入下さる方との直接的なコミュニケーションを大切にしています。

2016 年度は過年度に引き続き、日本各地の教会や学校を訪問しアジア学院の活動紹介や学生たちの置かれた社会環境、彼らが学

東京近郊にお住まいの支援者の皆さまに、日頃の感謝を込めてアジア学院のお昼ご飯にご招待。食卓を共にし、フードライフの根幹を体験して頂きました。(聖アンデレ教会にて)



シューマツハカレッジのホリスティック・サイエンス修士課程講師であり数学者のフィリップ・フランシス先生による講義を、那須セミナーハウスで開催。



ぶ目的や信仰についてお話しさせて頂く機会にも恵まれました。テレビやインターネットでも知りえない、学生たちの故郷で起こっている様々な問題について知り、また考えを深めるきっかけになったと、共感や応援の声を頂きました。

それから年4回の機関誌発行に加え、ホームページのリニューアル、新聞や地域情報誌にイベント実施の記事掲載をはたらきかけるなど、広報活動も積極的に行いました。

バザーなど外部で農産物を販売させて頂く際には、特にアジア学院を知らない方には、商品の持つストーリーや学院の活動などをお客様各人の興味関心に沿って直接伝えることに努めました。

アジア学院の施設や那須セミナーハウスにて、地域の人々を対象にしたコンサートやワークショップを開催、ご来場いただいたお客様の中には初めてアジア学院を訪問した方も多くいらっしゃいました。また、様々な大学のゼミやサークルからは有機農業や国際協力をテーマにした学習等の場として、JICA からは青年海外協力隊の任地派遣前補完研修のためにご利用頂くなど、一般の方の学び舎としての機会を提供することができました。1週間前後の滞在で農作業や学院での生活を体験するために訪れた方々からは、概ね大変満足した、という感想を得ました。

バザー先とキャンププログラムに参加した団体

バザー

ALFS（アジア婦人友好会）バザー、ワークスみぎわ木工市、聖テモテ教会バザー、日本基督教団関東教区総会、アースデイ那須、カトリック松が峰教会、日本基督教団関東教区婦人会修養会、クローチエバザー、日本基督教団神奈川教区婦人集会、日本キリスト教団宣教総合協議会、西那須野教会夏まつり、58 ロハスキッチン、宇都宮北高等学校祭、日本聖公会東京教区フェスティバル、黒磯南高等学校祭、グローバルフェスタ、マメゾン光星バザー、土と平和の祭典、子羊の家バザー、栃木の縁日、カトリックさいたま教区大会、大田原産業文化祭、鹿沼教会チャリティコンサート、フェアトレードまつり、立正佼成会那須教会バザー、栃木有機農業映画祭、ILBS（国際婦人福祉協会）クリスマスチャリティバザー、大日向マルシェ

スタディキャンプ参加団体

イングリッシュファーム、シューマツハカレッジ、宇都宮大学重田ゼミ、非電化工房、米国合同教会カリフォルニア、日本基督教大学高校、千里国際高校、(教)代田教会、自由の森学園高校、関西学院高校、勝山学園、聖隷クリストファー学園、横須賀学院、新島学園高校、共愛学園高校、明治大学寺田ゼミ、明治学院大学宗教部、立教大学YMCA、清泉女子大学YMCA、中央大学YMCA、(教)東大宮教会、学生キリスト教友愛会(SCF)、新島学園短期大学、青山学院短期大学、桜美林大学、同志社大学居住研究会、文京学院大学甲斐田ゼミ、慶応大学ティースマイヤゼミ、日本国際ボランティアセンター(JVC)、HTCボランティア、関西学院大学、国際基督教大学宗務部

COMMENT



ニスリーン・アボ＝スイド インターン(米、ウェルズリー大学)

「アジア学院に来る前は、私の『持続可能性』に対する考えは非常に狭く、「資源が枯渇する前に資源を使い切らない」といったものでした。しかし農場で働き、学生たちと会話をした後に、本当に持続可能であるためには、経済的に適宜に再生が実現可能でなければならず、この二つ(経済性と適宜性)が農村や僻地に住むリーダーにとって非常に重要であるということに気が付きました。」

国際協力課 キャシー・フローディ



海外のサポーター



国際協力課では、支援者の皆様、遠方より学院を訪ねてくれる新旧の友人たち、そして皆様の元へ出向いた折に得た、新しい出会いを大切にしています。アジア学院の世界中の支援者の皆さんとのネットワークは、40年以上前に高見敏弘名誉院長のかつての同僚や、国内外に住む彼の友人たちとで始められました。そして「共に生きるために」という私たちの使命が、支援者の皆様と友人たちとともに達成されるために、現在に至るまで継続してご協力を頂いています。この信頼関係は長短を問わず、40年以上でも数カ月間であっても等しく大切にしています。

デヴリースさんご夫妻

2016年の特筆すべきこととして、アジア学院の創設期からアメリカ合同教会の宣教師として20年以上アジア学院に奉仕し、校長も勤めたグレッチェン・デヴリース先生の姪御さんのメアリー・アン・デヴリースさんご夫妻が訪問して下さったことがあげられます。

メアリー・アン・デヴリースさんと夫のトム・シュリフさんは、数日間アジア学院に滞在し、彼女の叔母グレッチェンの足跡を辿りました。デヴリース先生と働いたことのある以前のスタッフやボランティアたちに会い、大好きだった叔母についての思い出話ができたとともに嬉しく思い、また感慨深かったと語っていました。「アジア学院の夢を形にした高見先生と働いた叔母グレッチェンの業績を、我々家族は特別の誇りに思っていました。家族の多くはグレッチェンの生前にアジア学院を訪問できたのですが、私は今までアジア学院に来ることが出来ませんでした。叔母の愛したアジア学院を見ることができ、そして現在の学院の生命力を見ることができ本当に幸せです。」

メアリー・アンとトムは、アメリカのアイオワ州で農業を営み、メアリー・アンは園芸家としてアイオワ州立大学の家庭菜園の公開授業の講師も務めていました。

新しい宣教の意義の発見

夏は訪問者が多くなるシーズンで、その中には複数の宣教グループの訪問もありました。これらのグループは学院メンバーのひとりとして、到着早々学院の生活に飛び込み、学院の運営に必要とされる仕事を手伝い、スタッフやボランティアや学生たちと触れ合いながら、学院の使命を理解していきます。アジア

学院でどんなことを経験したかと聞いてみると、あるグループのコーディネーターは、次のように答えました。「価値観が変わるような新しい経験を通して、宣教の新しい定義について学びました。福音を伝えるということだけではなく、多様性を見たり自分の狭い考えの枠について考えることを可能にする、ものの見方を広げることなのです。」

アジア学院のコミュニティと自己変革を促す雰囲気はボランティアやインターンとして滞在する若者たちにも同じように作用します。2016年度は海外の諸団体（EMS（ドイツ）、BVS—ブレゼレン教団（アメリカ）、アメリカ聖公会）からも長期ボランティアを、またアメリカ・ミネソタ州のセント・オラフ大学とボストンのウェレスリー大学からもインターンの学生たちを受け入れました。こういった新しいコミュニティメンバーは慣れ親しんだ環境を離れ、これまでとは全く違うコミュニティに身を置きます。安心できる日常が変化すること、彼

ら自身の能力と視野を広げることが彼らの課題目標となります。

支援者の方々の使命との連携

あるひとりのアジア学院支援者の注目することとして、リーダーシップ技術の向上があります。この支援者は、見捨てられ抑圧されたコミュニティ出身の人々を支援しています。このプログラムは自己変革の推進、貧困撲滅に焦点を当て、様々な機会が制限された人々を支援すること、そして「健康とリーダーシップの発展に貢献するという目的意識を持っている人材を支援すること」を願っています。アジア学院も学生を選考するときには同様の点に焦点を置いています。

他の支援者は「共に聞き、学び、互いの理解を深めること」を信条としています。この信条は貧困・飢餓の撲滅、生活必需品の充実、マラリアとHIV・AIDSとの戦い、差別をなくし平和に共存できるコミュニティの構築の根本精神である、他を思いやることに人々が気付いていくように導くものでもあります。アジア学院は毎年、多様な学生たち間の相互理解を促し、それぞれが力あるコミュニティを構築することができるように授業等を通して、飢餓や貧困の撲滅の方法、またコミュニティ開発の手法を模索し、リーダーシップの育成を行っています。つまり、支援者が掲げる使命や信条とも連携をしつつ歩んでいるのです。



食前にみんなと感謝の歌を歌うデヴリース夫妻(中央)



東京の聖アンデレ教会での日曜礼拝日曜に出席して教会員に挨拶するマクドナルド・ハンタ牧师。2010年度卒業生である彼は2016年の研究科生でした。

ネットワークを受け継ぐ

渉外・募金担当 菊池あゆみ



2016年4月にアジア学院の渉外・募金担当として着任しました。15年に渡り遠藤抱一副理事長が築き上げられてきた関係を、主に教会関係を中心に引き継ぐため、6月の中目黒教会を皮切りに、遠藤副理事長と共に首都圏を中心に支援教会・団体を訪問しました。教会訪問の他にも、引き継ぎのために数回首都圏事務所を訪ね、基本的な情報の引き継ぎと合わせて、募金活動を行

う上での心構えや考え方をご指導頂きました。

先日最後に、首都圏事務所を開設した2002年以降の毎月の活動報告書を、今後の活動の参考として受け取りました。2017年3月の最後の報告書まで目を通して流れを追うと、今当たり前のようにアジア学院に繋がって下さっている教会、団体、個人の方との関係の多くが、2002年以降に遠藤副理事長が丁寧に築き上げられてきたものだということが良く分かりました。と同時に、このように長く続く関係を私自身が繋ぎ、そして新しく作り出していく責任を重く感じています。

まず自分が慣れている場所から始めなさい、という遠藤副理事長のアドバイスで、2016年度は引き継ぎの教会訪問に加えて、所属教会である聖公会との関係を構築、深めることを活動の基準としました。結果として、管区事務所のアジア学院訪問の実現や、新しく繋がって下さった、再度関係を繋いで下さった、そして更に関係を強めて下さった教会や信徒の方々に恵まれ、良いスタートを切れたと感じています。2017年度は更に広く活動を展開し、より多くの支援者の方々に会って、新たな繋がりを作っていきたいと考えています。

成長する、教会との交流

共同体生活担当 ジョナサン・マッカーリー

毎年、関東地方のいくつかの教会でアジア学院サンデーが行われます。私たちアジア学院の学生たちが出かけて、様々な教会の礼拝に参加する時です。私たちが経験している神様の働きを分かち合い、また交わりと学びの時を持ちます。この伝統はこの農村指導者養成の研修が鶴川学院で行われていた時代から続き、50年以上継続して行われていること、そして毎年欠かさず行われ、さらにご協力くださる教会の数が増えているということに感謝します。今年も30の教会でアジア学院サンデーのご協力を賜りました。

毎年アジア学院共同体生活の担当として、学生たちにアジア学院サンデーの事前説明会をしますが、毎回開催することの意義に深く感動させられます。アジア学院サンデーはアジアサンデーという考えから始まりました。アジアサンデーは、日本のキリスト教徒がアジアのキリスト教徒との歴史のことを覚えるため、またこれからの宣教のために太平洋戦争後に始まりました。その意志は今でも受け継がれていると感じています。

毎回、アジア学院サンデーを通して、国と文化の違いを超える神の王国を求める使命を共に覚え、そして求めることが出来ると信じるに至ります。またマイノリティである日本人キリスト教徒にとって大きな励みであることでしょう。私たちが各教会で礼拝に参加し、た交流することで、日本のキリスト教徒が、イエス・キリストに従っている弟子たちが世界中にいることを覚え、またそれを通して励まされるのだと信じています。これからも神の王国を求める中で、アジア学院サンデーが今よりも祝福されるように祈って行きたいと思えます。



国内支援者・支援団体

(10万円以上の寄付・順不問)

教会関係

河内キリスト集會
 神戸ユニオンチャーチ
 神戸国際バプテスト教会
 国際基督教大学教会
 東京ユニオンチャーチ
 日本基督教団宣教協力学校協議会
 (カ) 援助修道会
 (教) 阿佐ヶ谷教会
 (教) 全国教会婦人会連合
 (教) 西那須野教会
 (公) 聖アンデレ教
 (公) 聖オルバン教会
 (公) 東京聖三一教会

諸団体

IKE 設計開発事務所
 アジア婦人友好会
 学生キリスト教友愛会
 全国友の会中央部
 チリウヒーター (株)
 西那須野ロータリークラブ
 光陽電気工事 (株)
 ワールドファミリー基金
 (医社) サマリヤ会
 (一社) わかちあいプロジェクト
 (株) 鳶ネットワーク
 (公財) あしぎん国際交流財団
 (公財) 全国友の会振興財団
 (公財) 三菱UFJ国際財団
 (公社) スコーレ家庭教育振興協会
 (宗) 立正佼成会那須教会
 (特活) WE21 ジャパンたま

(特活) 国際協力 NGO センター
 NPO法人民間稲作研究所

学校

(学) 青山学院中高等部
 (学) 関西学院中学部・高等部
 (学) さつき幼稚園
 (学) 女子学院
 (学) 同志社大学
 (学) 明治学院
 (学) 明治学院中学校・東村山高等学校

奨学金

東京霞ヶ関ライオンズクラブ
 東京南ロータリークラブ
 日本基督教団世界宣教部
 日本キリスト教協議会
 (カ) 聖コロンバン会
 (カ) 聖心会 (あけの星修道院)
 (一財) アジア農村交流協会
 (一財) 日本福音ルーテル社団
 (一財) まちづくり地球市民財団
 (一社) アクト・ビヨンド・トラスト
 (公) 東京聖テモテ教会
 聖テモテ奉仕奨学金委員会
 (公財) ウェスレー財団
 (公財) 森村豊明会
 (財) 大阪コミュニティ財団
 (財) 新倉会
 (社) 東京アメリカンクラブ
 (独) 日本学生支援機構 (JASSO)
 (公信) 久保田豊基金

訪問した教会・団体・学校

渉外関係 (訪問順、西日本キャラバンを除く)

【教会】(公) 宇都宮聖ヨハネ教会、(公) 東京聖テモテ教会、(公) 聖アンデレ教会、(カ) 松が峰教会、(公) 東京聖三一教会、(公) 小金井聖公会、(公) 阿佐ヶ谷聖ペテロ教会、(公) 聖パウロ教会、東京ユニオンチャーチ、聖路加国際大学聖ルカ礼拝堂
 【団体】日本聖公会管区事務所、聖コロンバン会、(公財) ウェスレー財団、日本基督教団事務局、聖心会、(財) 新倉会、(社) 日本福音ルーテル社団

ARI サンデー

(教) 鹿沼教会、(教) 那須塩原教会、(教) 宇都宮上町教会、(教) 西那須野教会、(教) 四條街教会、(教) 足利東教会、(教) 足利教会、(教) 矢板教会、(教) 小山教会、(教) 塩谷一粒教会、氏家教会、(教) 上三川教会、(教) 桐生東部教会、(教) 宇都宮東教会、栃木いこいの泉チャーチ、那須高原教会 (日本同盟キリスト教団)、(福音伝道教団) 鹿沼教会、(キ) 栃木教会、(キ) 松原教会、(教) 早稲田教会、(教) まぶね教会、(教) 中目黒教会、横浜ユニオン教会、(福ル) ルーテル千葉教会、(福ル) ルーテル藤が丘教会、(福ル) ルーテル本郷教会、(福ル) ルーテル保谷教会、(公) 横浜山手聖公会 (英語会泉)、(福ル) ルーテル都南教会

西日本キャラバン (11月5日～21日)

(教) 中京教会、名古屋ユニオンチャーチ、(バ連) 岐阜バプテスト教会、All Nation's Fellowship Church、Christ Bible Institute、近江兄弟社高校、(公) 川口基督教会、同志社大学今出川キャンパス、大阪女学院大学、同志社大学京田辺キャンパス、(公) 堺聖テモテ教会、プール学院、(教) 豊中教会、同志社大学新町キャンパス、同志社国際初等部、同志社大学今出川キャンパス (Habitat)、ろっざお (NGO)、関西学院高等部、Peace & Nature Cafe (NGO)、(教) 神戸雲内教会、(教) 京都上賀茂教会、(公) 芦屋聖マルコ教会、(教) 宝塚教会、関西学院大学三田キャンパス (理工学部、総合政策学部、関西学院大学上ヶ原キャンパス (中等部)、関西学院大学上ヶ原キャンパス (法学部) (商学部)、啓明学院、(教) 神戸栄光教会、頌栄短期大学、J House 教会、神戸イエス団教会ナイト・カフェ、(教) 神戸多聞教会、神戸ユニオン教会

訪問学校

立教大学、明治大学、明治学院大学、東京外国語大学、国際基督教大学、東京農業大学、新潟総合学園、新潟農業・バイオ専門学校、日本写真専門学校

訪問団体

日本国際ボランティアセンター (JVC)、国際協力 NGO センター (JANIC)、学生キリスト教友愛会 (SCF)、パーマカルチャーセンタージャパン、セイボジャパン、日本キリスト教海外医療協会 (JOCS)、(公社) 青年海外協力協会、国際協力機構 (JICA)、(一社) 協力隊を育てる会、ハビタットフォーヒューマニティ

(医社) 医療法人社団 (一財) 一般財団法人 (一社) 一般社団法人 (学) 学校法人 (カ) カトリック (株) 株式会社 (キ) 日本キリスト教会 (教) 日本基督教団 (公) 日本聖公会 (公財) 公益財団法人 (公社) 公益社団法人 (公信) 公益信託 (財) 財団法人 (社) 社団法人 (宗) 宗教法人 (特活) 特定非営利活動法人 (独) 独立行政法人 (福ル) 日本福音ルーテル教会 (バ連) 日本バプテスト連盟

海外支援者・支援団体

(10万円以上の寄付・順不問)

教会関係

米国合同教会・キリスト教会共同世界宣教
 Global Ministries of the United Church of Christ and the Christian Church (Disciples of the Church) - Common Global Ministry Board
 カナダ合同教会 The United Church of Canada

諸団体

アジア学院北米後援会
 American Friends of ARI

奨学金

合同メソジスト教会世界宣教 The United Methodist Church - General Board of Global Ministries
 アメリカ福音ルーテル教会 Evangelical Lutheran Church of America
 世界教会会議 World Council of Churches
 英国メソジスト教会 Methodist Church in Britain

会計報告

事務局長 佐久間 郁

皆さまのご支援に心より感謝申し上げます。

貸借対照表

2016年度は資産が約4千万円減少し、約10億7,500万円となりました。これは固定資産の建物の減価償却分によるところが大きいです。一方負債の部は約2千万円減少し約2億2,800万円となりました。負債は学校債償還や長期借入金の返済等合わせて約1千万円の負債を減らすことができました。

基本金の部は、学校法人会計基準の変更に伴い義務付けられている約1か月分の経常経費の組入れを実行し、1,100万円を第4号基本金に振り分けました。さらにこれまで奨学金特定預金（特定資産）として積み立ててきた72,712,488円は第3号基本金に当てはまるものと判断し、全額を第3号基本金に振り分け直しました。これらの振り分けにより基本金の部が約8,900万円の増額となりました。

消費収入

事業活動収入は、海外からの奨学金収入が約1,000万円減少しましたが、国内団体学費指定寄付金が昨年度よりも約650万円増加した為、学生生徒納付金全体では500万円の減少に留まりました。また付随事業収入はここ数年約2,500万円前後を保っており、安定した収入源となっています。

事業活動支出は、約4,000万円強の減価償却費及び、約8,900万円の基本金組入があったために膨らみ、収支差額が116,130,453円の支出超過となっていますが、学校法人会計基準改正に伴う必要措置を実行できたので、全体としては財務体制強化につながったと理解しています。

引き続き厳しい財政状況が続きます。今後も限られた人的・金銭的資源の中、支出抑制を意識しながらも、アジア学院のミッションの実現に向け、財政の安定化に努めていきたいと思っております。

監査報告

学校法人アジア学院寄付行為第7条の規定に基づき、2016年度の事業および会計の状況について監査した結果、適性に執行されたものと認めます。

2017年5月10日

学校法人 アジア学院

監事

監事

大久保知宏

村田 榮

貸借対照表

2016/4/1 ~ 2017/3/31

資産の部

	本年度末	前年度末
固定資産	992,512,759	1,045,953,670
有形固定資産	889,825,536	929,270,228
土地	216,420,666	216,297,236
建物	647,323,928	684,135,946
構築物	14,233,220	6,843,306
教育研究用機器備品	2,806,678	2,784,734
管理用機器備品	2,454,570	3,743,630
図書	6,380,612	6,380,612
車両	205,862	620,394
建設仮勘定	0	8,464,370
特定資産	89,912,130	83,595,275
第3号基本金引当特定資産	72,799,725	0
退職給引当特定資産	12,915,554	10,882,787
施設設備維持引当特定資産	4,196,851	0
奨学金特定預金	0	72,712,488
その他の固定資産	12,775,093	33,088,167
電話加入権	161,600	161,600
出資金	154,000	154,000
預託金	70,800	70,800
奨学金特定預金	12,388,693	31,112,693
建物修繕引当特定預金	0	1,589,074
固定資産	82,528,707	77,454,618
現金預金	72,015,438	30,996,955
未収入金	1,010,762	371,058
貯蔵品	423,000	0
販売用品	2,351,776	1,842,958
有価証券	2,537,599	38,790,201
前払金	3,974,808	5,336,878
仮払金	215,324	116,568
資産の部合計	1,075,041,466	1,123,408,288

負債の部

固定負債	109,709,224	144,472,103
長期借入金	57,580,000	67,240,000
学校債	9,800,000	31,500,000
退職給与引当金	12,046,840	9,046,840
復興事業修繕引当金	30,282,384	36,685,263
流動負債	119,114,624	105,554,359
短期借入金	68,543,433	63,660,000
学校債	27,710,000	7,010,000
未払金	3,101,013	11,437,153
未払金消費税	383,600	341,500
前受金	13,061,698	20,750,352
預り金	6,314,880	2,355,354
負債の部合計	228,823,848	250,026,462

基本金の部

第1号基本金	1,112,633,121	1,104,045,321
第3号基本金	72,799,725	3,421,280
第4号基本金	11,000,000	0
基本金の部合計	1,196,432,846	1,107,466,601

事業活動収支差額の部

翌年度繰越収支差額	-350,215,228	-234,084,775
内今年度事業活動収支差額	-116,130,453	-135,365,134

負債及び純資産の部合計	1,075,041,466	1,123,408,288
--------------------	----------------------	----------------------

事業活動収支計算書

2016/4/1 ~ 2017/3/31

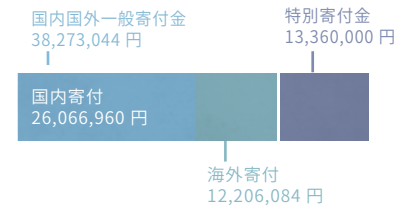


事業活動収入の部

	2016年予算	2016年決算	2017年予算
教育活動収入			
学生生徒等納付金 ⁽¹⁾	47,530,360	43,223,723	32,904,180
授業料	1,008,000	1,253,308	4,531,000
入学金	285,000	67,000	489,200
食事費	312,000	449,166	287,000
施設設備資金	312,000	421,932	287,000
国内個人学費指定寄付金			1,000,000
国内団体学費指定寄付金	18,308,000	18,266,000	16,508,000
海外団体学費指定寄付金	25,224,000	21,835,892	8,125,000
渡航費	2,081,360	930,425	1,676,980
手数料	11,000	20,000	52,000
寄付金	46,744,792	51,633,044	62,362,665
国内国外一般寄付金	42,946,000	38,273,044	52,250,000
現物寄付金	0	0	0
特別寄付金	3,798,792	13,360,000	10,112,665
経常費等補助金	2,884,200	3,276,970	3,323,600
付随事業収入 ⁽²⁾	24,046,700	24,734,196	26,663,750
雑収入	6,442,000	7,234,804	8,272,000
出版物売却収入			500,000
施設設備利用料	3,442,000	4,468,750	4,772,000
その他の雑収入	3,000,000	2,766,054	3,000,000
教育活動外収入			
受取利息・配当金	50,000	75,293	50,000
特別収入			
資産売却差額	2,085,379	1,980,857	0
事業活動収入合計	129,794,431	132,178,887	133,628,195

寄附金の種類別割合

合計 51,633,044 円



事業活動支出の部⁽³⁾

教育活動支出			
人件費	70,962,682	70,252,483	77,555,424
教育研究費	27,790,599	24,390,511	29,239,756
管理経費	67,720,852	62,058,952	64,748,158
(減価償却費)	(39,343,702)	(40,359,162)	(39,605,633)
教育活動外支出			
借入金等利息	1,014,000	1,072,530	1,690,490
特別支出			
資産処分差額	0	1,568,619	0
事業活動支出合計	167,488,133	159,343,095	173,233,828
基本金組入合計⁽⁴⁾	-1,600,000	-88,966,245	0
当年度収支差額	-39,293,702	-116,130,453	-39,605,633
前年度繰越収支差額	-234,084,775	-234,084,775	-350,215,228
翌年度繰越収支差額	-273,378,477	-350,215,228	-389,820,861

事業活動支出の内訳

人件費支出	70,252,483
教員人件費	18,859,927
職員人件費	43,603,356
その他人件費	7,789,200
教育研究費	24,390,511
消耗品費	181,091
光熱水費	1,683,418
旅費交通費	0
奨学費	4,804,140
見学費	2,125,778
実験実習費	6,046,034
学生交通費	99,270
学生渡航費	5,073,281
教材費	144,732
研究費	560,637
宿舍費	156,511
学生厚生費	500,505
職員研修費	488,314
事務費	439,128
諸会費	73,450
卒業生同窓会支援費	57,546
プロジェクト費	0
特別講師費	757,974
車両費 (バス・農業用車両)	1,198,702
雑費	0
貯蔵品振替差額	0
管理経費	62,058,952
消耗品費	279,441
光熱水費	1,683,419
旅費交通費	1,419,056
募金費	2,018,951
車両燃料費	1,053,417
福利費	218,170
通信運搬費	553,514
事務費	3,677,087
出版物費	381,571
車両修繕費	1,506,615
宮繕費	573,607
損害保険料	920,720
賃借料	982,861
公租公課	847,821
諸会費	127,700
会議費	342,645
報酬委託手数料	2,036,960
補助活動収入原価	2,428,808
行事費	36,934
渉外費	29,180
雑費	581,313
減価償却費	40,359,162
借入金等利息支出	1,072,530
借入金利息支出	689,530
学校債利息支出	383,000
資産処分差額	1,568,619
消費支出の部合計	159,343,095

【注記】

(1) 学生納付金には次のものが含まれる。

入学金：日本人学生納付金および海外学生に対する奨学金のうち入学金として指定されたもの

食事費：日本人学生納付金および海外学生に対する奨学金のうち食事費として指定されたもの

施設設備資金：日本人学生納付金および海外学生に対する奨学金のうち寮費・施設設備資金として指定されたもの

(2) 農産物、加工食品、民芸品等の販売、プログラム等による収入。

(3) 2016年度事業活動支出の内訳については、右頁を参照。

(4) 第1号基本金に8,587,800円、第3号基本金に69,378,445円、第4号基本金に11,000,000円を組入れた。



副理事長・法人財務室 室長 遠藤 抱一

アジア学院の 渉外・募金活動の15年



写真：遠藤抱一

学院は、毎年世界の約15か国から30名前後のNGOワーカーを招きますが、授業料を取りません。しかし彼らの研修には、毎年1億3千万円程度の費用が掛かり、うち1億円を寄付金として国内外で募金しなければなりません。

私は2002年、国内の渉外・募金活動に専念するため、首都圏での支援者開拓を始めました。多くの試行錯誤の後に、過去に献金、支援してくれたキリスト教会や教会関係団体、学校、財団等その全てにこれまでの支援のお礼と事業の成果を報告することから始めたのです。こうして1年2年と訪ね歩いているうちに、思わぬ情報や、教派毎の特徴や新しい支援者が見え始めて来ました。今その訪問記録を見ると都内の日本基督教団の教会だけでも110、近県も加えると200教会近くにもなっています。又福音ルーテル教会や聖公会、カトリック教会等も可能な限り訪ねました。こうした渉外活動の中から、毎年学生を礼拝に招き支援してくれる様々な教派の教会や奨学金を提供してくれる修道会、奨学金財団、研修事業を支えてくれるロータリークラブやライオンズクラブ等の奉仕団体や公益財団等とのパートナーシップが次第に築かれていったのです。

キリスト教主義の教育機関もパートナーです。国際的連携のあるカトリックの修道会やNGOは、学生の推薦団体としても大切な働きをしてくれます。又マイクロバス等の車両、コイノニア・ホールや教室の椅子、机の備品、ピアノ等もこうした訪問活動の中から実現したものです。

アジア学院の渉外活動とは、人々が共に生きる平和な世界の実現に向かって、その価値観を共有し様々な形で私達と関わってくれるパートナーと巡り合い、又招くための道程です。私達が何を目指し、そして何を支援者と共有したいのかは、まず人との信頼関係を築き上げてこそ、伝えられ理解されるものだと思っております。これからも「一步一步丁寧にそして誠実に」共に生きるための歩を進めて行きたいと願っています。

* 遠藤は3月をもって法人財務室長退職いたしました。理事職は継続します。

「興味や神学的観点が異なっても、『人に奉仕する精神』はアジア学院の職員を一つにしています。どんな小さな作業であっても、その一部一部が難しい状況にある人々を助けるため、平和な世界に貢献するために

というアジア学院の大きな仕事に繋がっています。」



遠藤 抱一

(会計報告に続く)

事業活動収入の種類別割合



事業活動支出の種類別割合



2016年度 コミュニティ

名誉学院長
高見 敏弘

専任職員

荒川 朋子
大柳 由紀子
荒川 治
佐久間 郁
キャシー・フローディ
菊池 あゆみ
櫻井 将伸
大谷 崇
ギルバート・ホガング
ザチボル・ラコー
マイカ・アンダーソン
ジョナサン・マッカーリー
ティモティ・B・アパウ
佐藤 裕美
山下 崇
八木沢 淳

非常勤職員

君嶋 満恵
荒井 興柱
田仲 順子
小林 麻奈美
福島 昌代
ベロ・ルイバ

嘱託職員

遠藤 抱一
藤嶋 トーマス 逸生
スティーブ・カッティング

校長
副校長、教務主任
副校長、教育部長、農場長
事務局長、総務
国際関係
国内事業(渉外・募金活動)
フードライフ(野菜・作物)
フードライフ(畜産)
フードライフ(畜産)
フードライフ(給食)、国際関係
教務(学生募集、卒業生アウトリーチ)
教務(共同体生活、チャプレン)
教務(共同体生活、チャプレン)、フードライフ(畜産)
国内事業(販売・庶務・広報)
国内事業(外部プログラム・那須セミナーハウス主事)
国内事業(渉外・募金・広報・支援者サポート)

総務(会計)
総務(庶務)
教務(図書)
フードライフ(給食)
国内事業(食品加工)
国内事業(那須セミナーハウス)(6~9月)

法人財務室長
国内事業(広報)
教務(卒業生アウトリーチ)(1月~3月)

職員

ボランティア

長期ボランティア

阿部・マノシ・チャタジー
マヌエル・ライフ
福島 春香
走出 雪
中田 佳菜子
前田 紗希
加治屋 桐乃
杉山 哲郎
増田 滄也
サラ・ヴァイラー
レイ・オリバー・ファブロス
上野 あゆみ
ウィル・マーチャント
菅野 まりや

学生選考
給食・学生選考
販売・共同体生活
国内事業部
給食
畜産
畜産
野菜・作物
野菜・作物
野菜・作物
学生選考
給食
国際関係
広報

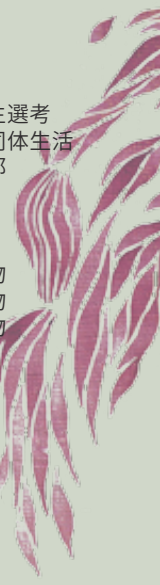
通いのボランティア

伏見 卓
小野崎 仁
高村 京子
伊藤 正
鈴木 由美
佐原 市郎
平山 隆
柏谷 重明
西野 順子
堀内 紀江
林田 綾子
藤本 和子
高木 聡史
マッカーリー 里美
清水 益男
岩出 貴子
古野 沙綾
吉田 典子
有村 敬子
ベロ・ルイバ
坂入 貴子

宮繕
宮繕
給食
販売
給食、総務
国内事業部
宮繕
販売
販売
販売
総務
給食
野菜、作物
共同体生活
畜産
販売
畜産
給食
給食
畜産
給食

ABC(アジア学院バクレルセンター) ボランティア

高嶋 幸雄
西川 峰城
藤本 渉平
早坂 孝行
阿久津 隆



役員

理事長

大津 健一 元アジア農村指導者養成専門学校校長

副理事長

遠藤 抱一 アジア学院 法人財務室長

常任理事

門脇 英晴 (株)日本総合研究所特別顧問
星野 正興 元日本基督教団松崎教会牧師

理事

飯沼 淳子 那須友の会
佐藤 範明 読売新聞那須塩原支局担当
田坂 興亜 元アジア学院理事長・
元アジア農村指導者養成専門学校校長
奥石 勇 日本聖公会前橋聖マッテア教会・新町マルコ教会牧師
山根 正彦 (学)香川栄養学園理事・総務部長
荒川 朋子 アジア学院 アジア農村指導者養成専門学校校長

監事

大久保 知宏 藤井産業(株)執行役員 総務部長
村田 榮 那須ワイズメンズクラブ

評議員

長嶋 清
米田 ミチル
星野 正興
門脇 英晴
山根 正彦
久世 了
セラジーン・ロシート
菊地 功
福本 光夫
小海 光
永田 佳之
千 相鉉
潘 炯旭
粟谷 しのぶ
山口 和枝
清水 たけし
荒川 朋子
遠藤 抱一
荒川 治
大柳 由紀子
佐久間 郁

元アジア学院職員
聖母訪問会総長
元日本基督教団松崎教会牧師
(株)日本総合研究所特別顧問
(学)香川栄養学園理事・総務部長
前(学)明治学院学院長
NGO/NPO コンサルタント
カトリック新潟司教区司教
(学)西那須野学園 西那須野幼稚園園長
公益財団法人 ウェスレー財団代表理事
聖心女子大学文学部教育学科教授
在日大韓基督教会札幌教会主任牧師
日本基督教団西那須野教会牧師
弁護士、コスモス法律事務所
元全国友の会代表
東京ユニオン教会長老
アジア学院 アジア農村指導者養成専門
学校校長
アジア学院 法人財務室長
アジア学院 副校長、教育部長、農場長
アジア学院 副校長、教務主任
アジア学院事務局長



2016年度卒業生

農村開発科

- ブータン** 1) カルマ・チュキ 農業省 自然農業プログラム
- 2) サンゲイ・ウァンディ 農業省 自然農業プログラム
- カメルーン** 3) フォンサ・パイウス・チック 持続可能な環境と男女参画開発のための地域主導活動
- 4) クンボン・ステラ・カン 障がい者リハビリテーション協会
- 5) チアンバ・エノック・ンタン ペロ農村開発連盟
- 中央アフリカ共和国** 6) ポール・ダイナ 中央アフリカ ルーテル教会
- ガーナ** 7) ポール・ヤオ・パイ 環境開発青年運動
- 8) エイブラハム・ブラッセ オスラマネ養蜂連盟
- インド** 9) アトン・シャイザ 開発における女性活動
- インドネシア** 10) マチルダ・ナインゴラン バタックプロテスタント教会
- 11) ヒエロニムス・マルティアディン・ンガンブ クラレチアン宣教会
- 12) パスカリア・イマヌエル・ペランギンアギン カロ・バタック・プロテスタント教会
- ケニア** 13) コンソラータ・アミシ・カカアリ 聖心会
- マラウイ** 14) セシリア・ンピンガ 衛生管理プロジェクト
- 15) トウェラ・ムタンボ チンガル復興開発プログラム
- ミャンマー** 16) ヨー・リン 北部ミャンマーメソジスト教会
- 17) トウラ・スン 北部ミャンマーメソジスト教会 ハカ支部
- 18) スイ・リアン・タン ファルンゴランド開発機構
- フィリピン** 19) ジュー・バリスビサン・ヘメネズ 聖心会 変革のための研修センター
- スリランカ** 20) サマン・ラトナシリ・バンダーラ ヴィスラ開発財団
- 21) イェヘロム・マイケル・ワンニエバンダーラ スリランメソジスト教会
- タンザニア** 22) ムイタ・バイタ・マテレ タンザニア メソジスト合同教会
- ザンビア** 23) ベルビン・カペンブワ・バンバ ザンビア村落水利協会

研究科

- インド** 24) レンタ・ングリエ
リェンマイ・バプテスト連盟
(1997年度卒業生)
- マラウイ** 25) マクドナルド・ンジャラ・バンダ
マラウイ聖公会 シレ高地地区
(2010年度卒業生)
- フィリピン** 26) アニー・ジェーン・ラガワン
水・森林農法・栄養・開発基金
(2010年度卒業生)

卒業生インターン

- 日本** 27) 谷澤 悠人
(2015年度卒業生)